

JASCT

ニューズレター

平成4年(1992年)6月

第11巻第2号

発行人：松本清一 印刷所：絢文社

第12回日本性科学学会を開催するに当たって

第12回日本性科学学会会長 亀谷 謙

今回、日本性科学学会を平成4年9月27日、三重県四日市市にて開催することになりました。性の問題に関し日本でもやっと正しい認識を望まれる雰囲気が醸し出されはじめた時期にも当り、本会を主催致しますことは誠に意義あることと光栄に思うとともに、責任の重大さを痛感いたしております。

さて、性教育の面ではかなり以前より、その重要性が認識され、それ相当の普及発展がされてきました。特に小学校では今回の学習指導要領改訂により、理科や体育の保健分野で人間の性に関した内容が大幅に取り入れられております。性教育は全人間教育であるとの観点から、特定の教科や領域で扱うのではなく学校教育全般を通じてすすめることになっていますが、まだまだ不十分であると思います。

高齢化社会を迎えた今日、老年の性の問題も漸次重要視され始め、今年より厚生省が全国の保健所に老年の性の悩みに対する相談窓口を設けるよう要請をしたことは卓見であります。残念ながらもまだまだ対応しきれない現状であります。

世界中で「人の心を大切にすること、自然を愛すること」が叫ばれている今日、これをモットーとして「人の心を大切にする性の学会」が開かれ、また、伊勢神宮の荘厳な自然の雰囲気に浸っていただくことも、大いに意義あり、時宜を得たものと嬉しく思っております。

沢山の方達にご参加下さり、理解を深めていただければ幸いです。

第12回日本性科学学会のご案内

期 日 平成4年9月27日(日) 午前9時～午後6時
会 場 四日市市文化会館(三重県)
学 会 長 亀谷 謙(小山田記念温泉病院婦人科、名古屋市立大学医学部講師)
参 加 賞 3000円(8月31日までの申し込みは2500円)
特別講演1 演題「神宮式年遷宮」、演者：河合真如(神宮宮掌)
特別講演2 演題「リプロダクティヴヘルスと性」、演者：多賀理吉(横浜市立大学医学部産科婦人科学教室助教授)
シンポジウム1 テーマ 「性教育(幼児期から老年期の全生涯に亘る)」
司会：今村 要道(日本性教育学会理事、京都大学講師)
シンポジウム2 テーマ 「中高年と性」
司会：熊本 悦明(札幌医科大学泌尿器科学教室教授)
事 務 局 〒510-11 四日市市山田町5538-1 小山田記念温泉病院内
第12回日本性科学学会事務局 TEL 0593-28-1260 FAX 0593-28-3040
(郵便振替口座番号 名古屋 1-120179)
名 称 第12回日本性科学学会

Vol. 11

№
2

JASCT 事務局

〒107 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

大人の男になることへの不安

神 尾 記 念 病 院
JASCTカウンセリング室 堀 一 子

Aさんは科学者29才。奥さんは25才。見合結婚。新婚初夜は、勃起不十分なまま挿入を試みましたが、場所もよくわからずまごまごしているうちに萎えてしまいました。二人ともそれまでに性体験がありませんでしたので、始めはこんなものかもしれない、そのうちなんとかなるのじゃないかと思っていました。しかし、半年経っても一向に事態は変わりませんでした。だんだん、試みることも減って、受診までの数カ月間は、まったく性生活は試されていませんでした。性生活はこのようでも二人は、はた目にもとても仲の良い夫婦でした。Aさんの奥さんはこのことで決して感情的に夫を責めたりしませんでした。夫が十分傷ついていることがわかっていたからです。まず、彼女は半年間様子をみました。半年経っても彼が自らは何もしないので、彼女は病院を捜し受診を勧めました。Aさんは奥さんには申し訳ないと思うのですが、性的な問題で病院へ行くというのは、考えるだけでも恥ずかしさと恐さで心臓が止まりそうになるのです。ただ、困ったことに、この頃慈母観音のようにやさしい彼女から、明るい笑い声や笑顔が消えてきました。もうこれ以上逃げていられなくなり、Aさんは治療に訪れたのです。

どうしてこのような事態に至ったのか、彼の今までの生き方を振り返りながら、Aさんと一緒に考えていくことになりました。家では、性行為が二人のコミュニケーションだと言う原点に戻り、挿入をしばらく控え二人でゆっくりお互いの身体を愛撫し合うタッチングをしていただくことにしました。

ところが、身体的原因の有無を確認するため、泌尿器科で診察を行ったところ、Aさんのペニスは手術を要する程度の包茎だということがわかりました。包茎の場合、包皮と亀頭との間に垢がたまりやすいものですが、Aさんもそうでした。ただ、Aさんの場合その量がおびただしく異様な臭いを放っていました。Aさんはペニスの先を一度も洗ったことがなかったのです。洗うどころか、彼はペニスの先端部に触ったこともなかったのです。それから大変でした。診察にあたった医師が根気よくその垢を取り除きその部分を清潔にしたのですが、医師の手がAさんのペニスに触れる度に、手が近づいただけでAさんは悲鳴を上げるのです。

Aさんは私に包茎を隠していたのではありませんでした。自分が包茎だということを知らなかったのです。また、Aさんの奥さんにも包茎についての知識がありませんでした。

事態はだいぶ深刻なようでした。二人の性生活をもう一度洗い直しました。Aさんは彼女の性器には、見ることも触ることもできません。でも、二人の話によると奥さんは、彼のペニスに触れていたはずでした。これはどういうことでしょうか。真相は、彼女が触っていたのはペニスというよりはペニスの周辺か、せいぜいペニスの根元の部分だったのです。Aさんが高校生の頃からしていたマスターベーションは、下着をつけたまま上から手で触るだけのものでした。Aさんの、ペニスの先端に直接手で触れたのは今回治療にあたった医師が初めてだったのです。その時の痛みは、後で思い返すと本当に痛かったのかどうかかわらないとAさんはおっしゃいます。ただ、そのような事態になると混乱してしまい痛いと感じたのだそうです。この痛みは、彼自身の中にまだきちんとおさまっていない男性性への恐怖だったのでしょうか。

4カ月ほど先の夏期休暇に包茎の手術をすることにしました。しかし、そう決めた日からAさんは落ち着かなくなりました。「夏がこなければいいな」「妻とこのままで一生過ごせたらいいな。世の中の仕組みがそうならないかな」などと子供のようなことを考えるようになりました。

思い返してみると、Aさんは子供の頃から苦手なことは人以上に上手にすり抜けてきたような気がします。彼は水泳が苦手でした。毎年プールのシーズンになると、近所のかかりつけの医師に診断書を書いてもらい、上手に水泳の授業を休んでいました。今年こそはもう書いてもらえないのではないかとびくびくしながらも、とうとう学生時代をそれで通り抜けてしまいました。

Aさんは他の学業は優秀ですが、このようにスポーツ・図画工作・音楽など、ある種の勘を必要としたり、体で覚えていくようなものは苦手です。しかし、ジェンダー・アイデンティティーこそがまさにこれらのように生活の中ではぐくまれていくものであって、知的に習得するものではありません。Aさんは、今までそれら苦手な分野には知力をしばって遭遇しないようにしてきました。

ところで今度の場合だけは、今までのやり方が通用しなくなったのでしょうか。結論を先に申しますと夏が来る前にAさんは治療場から姿を消しました。また、窮地から上手にすり抜けてしまったのです。ここで、Aさんは一旦治療の機会を逃したのですが、私はむしろこの場合はこれで良かったのではないかと考えています。今までの防具をはぎ取られた上、新しい武器を手に入れることもできないまま、大きな敵に正面からぶつかって行ったのでは粉々に打ち負かされるだけです。

Aさんの奥さんが、ある日私に「主人が一番恐れているのは、私がどこかへ行ってしまうことなのです。そんなことないのに」とおっしゃったことを思い出します。Aさんが治療から逃げ出してきた、彼を捨て去らなかった奥さんとの間で人間としての基本的な信頼能力を身につけ、彼が大人の男性に育ってくれることを願っています。

私の性治療経験

有田市立病院産婦人科 西 丈 則

私の勤める病院は和歌山市から南へ約40kmの所に位置する密柑と漁業の町、有田市である。かつては高校野球で名を馳せた箕島高校もこの地にある。私は1990年より当地で性カウンセリングおよび性治療を行い、これまで7組の症例に巡りあった。それらはそれぞれに興味深く、また、示唆に富むものであった。以下にその症例のいくつかを示す。

症例1) 未婚の32才の女性が性交痛を主訴に来院した。友人の紹介で結婚を前提に交際を開始し、性的関係を持つとするも余り気が進まず、性交痛を感じるようになったとの事であった。相手の容姿、低収入、借金のあることなどを知り、それらの事が負の因子として働き、性嫌悪、潤滑不全、性交痛へと進んでいったものと思われた。カウンセリングを開始するも効果は芳しくなかった。その後一時期来院しなくなった。約5カ月後、笑顔で再来院した。新しい相手ができ、性的関係もうまくいっているとのことであった。

症例2) 結婚4年目の24才の主婦が挙児希望を主訴に来院した。夫は24才のサラリーマンで、仕事から帰るとすぐに自宅に閉じ込み、パソコンに夢中となり妻との性関係を避けていた。その間に妻は寝入ってしまい、お互い挙児希望であるに拘らず性的関係は殆どもてていなかった。夫はマスターベーションにて性的欲求を解消していた。治療により性回避は解消し、現在2人には念願の妊娠が成立している。

症例3) 結婚6年目の29才、短大卒の主婦が未完成婚とのことで他院より紹介となった。18才より現在の夫と交際を始め、結婚前には2人だけで旅行していたが、性交恐怖および性交痛のため性交は完遂せず、この状態が結婚後も続いていた。夫婦は1週間に1度の頻度で相互マスターベーションが行われ、お互いはオーガズムに達することができたとのことであった。しかし、夫は性交が完遂しないことに強い不満を持っていた。妻の性知識は貧困であり、また、夫は性的問題を他人に話すのは絶対嫌とのことで来院を拒否していた。次回面談を約束したが来院せず、電話では離婚することになったとのことであった。

症例4) 結婚4年目、短大卒の32才の保母が挙児希望を主訴に来院した。結婚2年目に同じ主訴で2人で産婦人科医を受診し、排卵誘発等の治療を受けていたが、途中で通院を中断していた。今回の問診、診察にて不妊の原因は陰瘻および性無知による未完成婚と判断された。2人は結婚以来股間性交(いわゆる素股)を行っており、妻はそれが正常な性交と思っていた。そして、このことが「性交渉が持てているに拘らず妊娠しない」との訴えとなっていた。また、妻は未だかつて精液を見たこともなく、性に対し無関心、無知であった。カウンセリングを開始し、陰茎挿入可能と判断される段階にまで到達したとき、夫(37才)がインポテンスに陥った。またこの頃には、性機能不全の原因をお互い相手に求め、夫婦不和が顕在化していた時期でもあった。その後のカウンセリングにより陰茎挿入は可能となり、妻の性交痛も消失、オーガズムも得られているということであった。

症例5) 結婚3年目の25才の主婦が挙児希望を主訴に来院するも、不妊治療を進めていくうちに、オーガズム不全、性嫌悪および性交痛で悩んでいたことを訴えるようになった。夫婦でのカウンセリングを始め、妻の状況を理解した夫は妻に満足を与えようと努力し、その事が精神的負荷として働きインポテンスに陥ってしまった。このため夫にもカウンセリングを開始することとなった。治療により勃起は保てるようになったが、今度は早漏で困っている。もう少しカウンセリングを継続する必要がある症例である。

以上、主なる症例を呈示したが、当科を訪れる患者で未完成婚、オーガズム不全、性交痛など、主訴の段階で性カウンセリングまたは性治療を求めて来院する患者は少なく、主訴に隠れた性機能不全を探し求めなければならないこともしばしばである。また症例4)および症例5)にみられたように妻の性機能不全の改善が、あるいは、その治療そのものが夫に性機能不全を誘発することもある。一方、症例3)の様に医師にさえ性機能不全であることを知られるのを極度に嫌い、治療に抵抗を示す症例も見られる。また、性カウンセリングを必要とする人達の性知識レベルは概ね低いように思われた。性治療には、カプランをはじめ幾多の流派が存在する。そして日本にも性典といわれるものが種々存在する。医心方もその一つであろう。医心方「房内」至理第一に交接に際しての心得ともいうべき言葉が見える。「交接之道故有形状、欲知其道在於定気安心和志」である。「定気」「安心」「和志」の三気至れば「性必舒遲」とある。略説ではあるがその内容には意味深いものがあるように思われる。また、Hawton, K. (1985, Sex Therapy) が "Services for people with sexual problems are patchy, especially in the UK." といっているが、わが国でもこの言葉は真実であろう。カウンセラーおよびセラピストの充実が待たれる。

国際学会のお知らせ

The 35th Annual Meeting. The Society for the Scientific Study of Sex.

日 時 1992 年 11 月 12 ～ 15 日

場 所 San Diego, California, U.S.A.

(ただし、演題提出期限はすぎています)

XI World Congress of Sexology. (第 11 回世界セクソロジー会議)

日 時 1993 年 6 月 1 ～ 5 日

場 所 Rio de Janeiro, Brazil.

第 12 回世界セクソロジー会議について

○会 期 1995 年(平成 7 年) 8 月 22 日(火) ～ 8 月 26 日(土)

○会 場 横浜市・パシフィコ横浜

○主 催 第 12 回世界セクソロジー会議組織委員会

○共 催 日本セックスカウンセラー・セラピスト協会 日本インポテンス学会

(社)日本家族計画協会 日本思想期学会 (財)日本性教育協会

○協 賛 世界セクソロジー学会(World Association for Sexology=WAS)

備 考 性科学の国際交流の歴史は 1974 年のフランス・パリの会議に始まり、1992 年の現在まで 10 回を重ね、1995 年の第 12 回大会は初めてわが国で開催されることが決まりました。会長には松本清一 J A S C T 会長が内定しております。わが国におけるセクソロジーの発展に寄与するのみならず、アジア諸国、ひいては世界のセクソロジーの発展に貢献できるものと期待されます。

新入会員

お手数ですが、お手持ちの名簿にご加筆ください。